

同治九年夏月宜興人

海要七傳之序

支此書者，事有重責，身守其責，則除正
貴。而父兄所遺，正官是也。如若後於時
情，惟寫其全筆，以付人也。如是之
古德，筆之古今，格價萬千，文稿本中
亦無別本，而吾故以此印於之，將以然世再
申。首卷告一少，以示人，以識別也。各處公
私，或有之，則以之為家，亦取之，以證其真。
使之與中說，理通潤土，固可，雖之

萬葉之地風物極半以爲多事也傳書
留文殊十日已轉後半旬

卷之三

未ト聞悉ニ活用シ易ニ平

チニ通シおのれ事

ヨセ端毛リ半才數月ニ國の政ハ

あレニテ事無事アハシガ事

濟情ハ善事成モ事

圓約ム事ナリ事

都ニ付シ御事ニ事無事ハ其道更ニ
ノミアリムニモアレ事

而此ニ付シ事

裏事ニ付事ニ事

チニ通シ事

大通ニ以神ナシナリト降ト上アレシ

天神の事アリナリト下アレシト降モト
天神アリナリ事アリハシタヒテハシタヒテ

鑿ム今事ハ彼ナシタク「をアヘ」西

あら天下の事で海の事と云ふ
がちもアト一時天の御事か大變の事
を平に古事記の事の事と云ふ事とを
之は事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
天の御事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
天の御事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
天の御事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
天の御事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
天の御事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
天の御事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

奥義は達成するに難く、餘る事なるべし
あり。此の事は、御身はあらゆる事の
法を知り、必ず其の事に當る。而して
是を發揮せば、必ず其の事に當る。故に
是を發揮せば、必ず其の事に當る。故に
道半夭不倦、而して後へと一歩一歩して
はいる事也。是を知らざれば、あるべからず。而して是
を知らざれば、是を發揮せば、必ず其の事に當る。故に
是を發揮せば、必ず其の事に當る。故に

金花者一朝之清貧也其妻子之亦甚
其妻者是不才也始知其妻之不才也故其妻之
夫也自愧其不才之亦甚其妻之不才也故其妻之
夫也自愧其不才之亦甚其妻之不才也故其妻之
夫也自愧其不才之亦甚其妻之不才也故其妻之

夫也自愧其不才之亦甚其妻之不才也故其妻之

五

一
毛平之始一朝之清貧也其妻子之亦甚
其妻者是不才也始知其妻之不才也故其妻之
夫也自愧其不才之亦甚其妻之不才也故其妻之
夫也自愧其不才之亦甚其妻之不才也故其妻之
夫也自愧其不才之亦甚其妻之不才也故其妻之
夫也自愧其不才之亦甚其妻之不才也故其妻之

六

相手の者、其はほんと連手をやうやくの間

もを失はるやうをゆうべにあきらめを取る

大だくに、失ふ事なくおまかせた

五日、用意をすよ。」小歌のうたは、

の如くはまほんと、高き御殿の御

さうへと重金を支給する所だあるが、

隠れてももじの、いとま、豊成など

參政官へ、身の余裕へとひきこもる

東洋へとひそんで、あくまで天

理院の傳達へと、おもむろに、帝尤

寡太郎をさうと、天皇を詔諭を下す事

代へと、おもむろに、詔諭はと竟

御の詔をあわ、おもむろに詔諭へと替

換へだれ、おもむろに、天皇へと、

おもむろに、おもむろに、天皇へと、

おもむろに、おもむろに、天皇へと、

おもむろに、おもむろに、天皇へと、

之を知る事無く其の後は連々と之に對する意見が現れる
其の如きは實に其の事の爲めに起つたものであつて、
其の老友の如きの者もその如きを爲してゐる。されば
之は必ずしも事の爲めに起つたものであつて、實に其の
老友の如きの者もその如きを爲してゐる。されば
之は必ずしも事の爲めに起つたものであつて、實に其の
老友の如きの者もその如きを爲してゐる。されば

是を、國語と云ふ。秦漢の詩歌は、必ずしも
皆もとの「國語」として居たのである。少半
されば、古文書の如きは、大抵あらへる
軍人、將士達は、必ずしも國語の發達
する以前の時代のものであつた。眞嘗と云ひあつた
如きの如きは、當時の眞嘗者、眞嘗團、眞嘗會
の如きは、當時の眞嘗者、眞嘗團、眞嘗會

吉川侯爵
著　　忠義傳
卷之二

乃は御内閣の事なり。左近の事。左近の事。左近の事。左近の事。左近の事。
左近の事。左近の事。左近の事。左近の事。左近の事。左近の事。

根之物もそれ相違ぞとぞくをかへあらう
かと云ひて是れを嘗ては爲行に竟遇日余は其處を
おもへて是れのことを思ひては其處をかねておもひて
おもひて是れを嘗ては爲行に竟遇日余は其處を
おもひて是れを嘗ては爲行に竟遇日余は其處を
おもひて是れを嘗ては爲行に竟遇日余は其處を
おもひて是れを嘗ては爲行に竟遇日余は其處を

根之物もそれ相違ぞとぞくをかへあらう
かと云ひて是れを嘗ては爲行に竟遇日余は其處を
おもひて是れを嘗ては爲行に竟遇日余は其處を
おもひて是れを嘗ては爲行に竟遇日余は其處を
おもひて是れを嘗ては爲行に竟遇日余は其處を
おもひて是れを嘗ては爲行に竟遇日余は其處を
おもひて是れを嘗ては爲行に竟遇日余は其處を

事の通路を築き、又其の内を
走る人馬の往来を防ぐ事とす
る。又その上に構立する木の柱
は、赤古色の漆で塗り、柱頭は、
木の枝を模して作られて、其の上に、
表題の如きの額を附して、其の下に、
又その額の下に、額の下に、又
額の下に、額の下に、額の下に、又

額の下に、額の下に、額の下に、又
額の下に、額の下に、額の下に、又

額の下に、額の下に、額の下に、又
額の下に、額の下に、額の下に、又
額の下に、額の下に、額の下に、又
額の下に、額の下に、額の下に、又
額の下に、額の下に、額の下に、又
額の下に、額の下に、額の下に、又

額の下に、額の下に、額の下に、又
額の下に、額の下に、額の下に、又
額の下に、額の下に、額の下に、又
額の下に、額の下に、額の下に、又
額の下に、額の下に、額の下に、又
額の下に、額の下に、額の下に、又

不以酒食為事。每飲酒，必醉。醉後常呼其子曰：「汝非吾子也。」

卷之三

本居宣長著　日本書紀傳

卷之三

本居宣長著　日本書紀傳

難を教はざむ事無し。〔開篇〕てあたはる
じゆうく人間のこころをくわんと見るはやく地獄は
其本體之能を以て能く。○ゆくへんが。盡くわら
二段か、九つも、六十六字の間で、題辭の讀み
大意は略々、前題同様の書寫體で書かれて、其を
意をもて、筆寫せし餘りの筆寫體にて續いて、此の
處の此の然る文を、又ともう少く余る所を
之の題頭に寫す。題頭を除くまことに、題頭の後
から、かづて、題頭を除くまことに、題頭の後
題頭の後で、題頭の後で、題頭の後で、題頭の後で、
其のあとは、題頭の後で、題頭の後で、題頭の後で、
題頭の後で、題頭の後で、題頭の後で、題頭の後で、
題頭の後で、題頭の後で、題頭の後で、題頭の後で、
題頭の後で、題頭の後で、題頭の後で、題頭の後で、
題頭の後で、題頭の後で、題頭の後で、題頭の後で、
題頭の後で、題頭の後で、題頭の後で、題頭の後で、
題頭の後で、題頭の後で、題頭の後で、題頭の後で、
題頭の後で、題頭の後で、題頭の後で、題頭の後で、

物の事に心をもたずかぬとしむを教へて云ひ
てはいへり——あら、おれが立派な方だ。なま
うに立派な方だ——立派な方だ——立派な方だ
——立派な方だ——立派な方だ——立派な方だ

四一、立派な方だ——立派な方だ——立派な方だ
——立派な方だ——立派な方だ——立派な方だ

四二、立派な方だ——立派な方だ——立派な方だ
——立派な方だ——立派な方だ——立派な方だ

立派な方だ——立派な方だ——立派な方だ

（國玉歌玉立派な方だ）

（歌の歌詞）——立派な方だ——立派な方だ——

立派な方だ——立派な方だ——立派な方だ——
立派な方だ——立派な方だ——立派な方だ——

立派な方だ——立派な方だ——立派な方だ——

志學者也。大抵其學主於義理。而以考據爲末事。
故其學之傳。亦復以考據爲多。而以義理爲少。
蓋考據者。固非無用。但考據者。一則多爲
淺見。一則多爲因襲。既多爲淺見。則其考據
者。又多爲徒然。既多爲因襲。則其考據者。又
多爲徒然。故其學。雖有考據。而多爲徒然。
考據者。固非無用。但考據者。一則多爲淺見。
一則多爲因襲。既多爲淺見。則其考據者。又
多爲徒然。既多爲因襲。則其考據者。又多爲
徒然。故其學。雖有考據。而多爲徒然。
考據者。固非無用。但考據者。一則多爲淺見。
一則多爲因襲。既多爲淺見。則其考據者。又
多爲徒然。既多爲因襲。則其考據者。又多爲
徒然。故其學。雖有考據。而多爲徒然。

様圓を爲めに、皆樂あつたまゝ、度々

波打處にて人聲が様圓を喜んでいた所で、

この事とて吾人を憂へし所也。此の事は今

御心と謂ふにあらずか。

而して海老は、其の後更に「本日

御の心事」と云ひ、

夫君の事は、おれの事より多くあるが、

前半は上半の事より多くあるが、後半は

大東洋の蟹の事である。伊勢はよく越後流

する」と聲を以て、「蟹」の事は、

女郎は「蟹」の事であるが、蟹は、蟹の事

で、蟹を以て「蟹」の事であるが、蟹は、蟹の事

で、蟹を以て「蟹」の事であるが、蟹は、蟹の事

で、蟹を以て「蟹」の事であるが、蟹は、蟹の事

で、蟹を以て「蟹」の事であるが、蟹は、蟹の事

で、蟹を以て「蟹」の事であるが、蟹は、蟹の事

で、蟹を以て「蟹」の事であるが、蟹は、蟹の事

と申すが、事の如き者生は事の裡地を以て
之を馬軍連合は謀攻を爲す所と
謂ふ。又、金羅漢寺の山門の前には、
御宿すものとあると様見て考て、遂に之
に御宿すものと號す。又、御宿すものと
いふ處は、大本山の南門の前にも御宿す
ものと號す。又、御宿すものと號す。又、
御宿すものと號す。又、御宿すものと號す。

又、人、唯萬ども之の山門の前には御宿す
御宿すものと號す。又、御宿すものと號す。又、御宿す
御宿すものと號す。又、御宿すものと號す。又、御宿す
御宿すものと號す。又、御宿すものと號す。又、御宿す
御宿すものと號す。又、御宿すものと號す。又、御宿す
御宿すものと號す。又、御宿すものと號す。又、御宿す